

1988年4月、ヒトゲノム国際機構が設立された。ヒトの全遺伝情報を解読しようとヒトゲノム計画に向けて世界が動き始めていた。同年5月、国立遺伝学研究所の石浜明研究室に山崎由紀子が加わった。山崎は企業や大学での研究生活を経て米国に留学していたところ、その研究テーマを続けてどうかと石浜に迎え入れられたのだった。

石浜研では大学院生2人が日本DNAデータバンク（DDBJ）のアルバイトをしており、山崎もそこに

ヒトゲノム計画が加速

加わった。まず、タイプストが入力したデータを元の論文と照合する。そしてDNAがどのような生物から採取されたか、遺伝子としてどのような機能を持つかといった注釈を、米欧のデ

ータバンクと申し合わせた用語と形式で入力する。最後にデータの整合性をチェックするまでが仕事だ。仕事場は、遺伝情報研究センター棟4階の計算機室だった。DDBJの運営を担っていた宮沢三

造は、山崎に事細かな指示はせず、計算機に打ち込むコマンドのリストを渡しただけだった。ただ、計算機が止まるとすぐに対応してくれた。

やがて仕事内容への理解を深めた山崎は、たった3枚のコマンドリストが必要十分だったことを実感するようになったという。

ヒトゲノム計画に向けて、国内でも89年度からの2年間で準備期と位置づけられた。国際プロジェクトに相應の貢献をしなければ、後々データへのアクセスが制限されかねない。DNA解読システムの高速化と大型化を進め、それに合わせてDNAデータの登録と公開も迅速にできる体制が必要だった。そのためにはDDBJを強化するのが自然なシナリオだった。

遺伝情報研究センター
1 計算機室での宮沢三造（右から2人目）
11990年ごろ



（伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員）